

ソラマメが主人公の絵本シリーズが大人気！

——最新作『そらまめくんのあたらしいベッド』を語る——

なかや みわ

数々のヒット作をもつ絵本作家、なかやみわさん。代表作の「そらまめくん」シリーズでは、えだまめくん、さやえんどうさん、ピーナッツくん、グリーンピースのきょうだいたちといった、さまざまな豆たちが原っぱでくらす様子が描かれています（6～7ページにシリーズ全冊の内容紹介あり）。ソラマメのふわふわのサヤをベッドに見立てたように、豆の実際の姿から、登場するキャラクターや世界観を作り込んでいくとのこと。最新作『そらまめくんのあたらしいベッド』の制作裏話など、絵本作りの実際についてお話を伺いました。

会社員時代に考えたキャラクターが原型

もともと、絵本を描きたいというのは特になかったんです。絵本作家になる前に、企業でキャラクターグッズを開発・商品化するデザイナーをしていたのですが、その時に考えたキャラクターが「そらまめくん」の原型になっています。

3年間の会社員時代に、社内コンペに何度か参加させてもらう機会がありました。

キャラクターを提案してプレゼンする場が与えられ、社内投票などでトップになると商品化されるという流れで、新規のキャラクターは世にでるんです。当時は、今でいう“ゆるキャラ”といいですか、一筆描きのようなキャラクターが流行っていて。私も豆の形をしたシンプルなキャラクターを考えて提案したのですが、結局ボツになり商品化はされませんでした（笑）。その後もコンペの機会があれば、世の中の流行をリサーチしては提案することを繰り返していました。

リサーチの時よく参考にしていたのが、海外の絵本でした。洋書には“おさるのジョージ”とか“ぞうのババール”といった



最新作『そらまめくんのあたらしいベッド』を手にするなかやみわさん

キャラクター性の強い絵本が多く、自身でもそういうキャラクターが好きで「自分が作るならこっちな」と思いながら、洋書売り場によく通っていました。かたや日本の絵本にはなんとなく教育的なイメージがあって、あまり興味がありませんでした。

でもある日「日本の絵本には何があるのかな」と思って、フラッと行ったことがあったんです。そうしたら、私が小さい時に大好きだった覚えのある絵本がたくさん置いてあり、それを今、リアルタイムで生きている子どもたちが夢中になって読んでいるのを見て衝撃でした。古さを感じさせない、絵本はそういうものだとわかって、いい仕事だと思ったんです。私も、自分で作ったものを長く大事に親しんでもらいたいので、自分がやりたいことと絵本は近いのではと思ったのが、描きたくなってきたきっかけです。

現役の絵本作家に絵本作りを学ぶ

今度は商品を作るためではなく、自分の絵本が作りたくて本屋に通うようになり、絵本をたくさん読めば読むほど、その世界が面白くなりました。でもコネも何もなかったのが、情報が欲しくて、雑誌の広告で絵本作りの講座をみつけて通うことにしました。

そこでは川端誠先生という、今も現役の絵本作家の方に手作り絵本を持ち寄って見ていただき、そのあと受講生みんなでここがよかったとか、わかりにくかったとか、講評し合うことを1年続けました。その時



出版社に見せた手作り絵本（ダミー本）。即デビューが決まった

にいくつか描いたなかで、川端先生が「これ面白いじゃない」といつてくれたのが、ボツになったけれど自分では気に入っていた、豆を主人公にした“そらまめくん”のお話でした。

絵本の仕事がますますやりたくなったのに、その頃会社の仕事はかなり激務で、創作の時間がなかなか作れませんでした。勤めていた会社のキャラクターグッズの企画は、その時の流行に合わせてリサーチをして、「どうやったら売れるか？」とデザインを考え、大事に育てながら提案をするのですが、思いをこめて発表しても、いざ世に出て売れ行きが悪かったりすると、キャラクターはすぐに淘汰されてしまいます。「じゃあ次」とコンペがまた始まるんです。キャラクターデザインに向いている人は、どんどん提案できるのですが、自分はあまりそういうのに向かないなど。いろいろ悩みはあったのですが、若さの勢いもあって辞めちゃえ！と会社を辞めました。

その後、松田素子さんという絵本の編集者の講座に通って、意見をきいて手直しし

ながらダミー本（実際の絵本のような形に作った見本）を作り、出版社を紹介してもらいました。自分が好きな本が多かったという理由で福音館書店に行き、ラッキーなことに最初の持ち込みで、月刊誌に描かせてもらうことになりました。それが1997年5月号の「こどものとも」でのデビュー作（『そらまめくんのベッド』）です。読者の反応がよかったので続編もだせて（『そらまめくとめだかのこ』）、それから仕事がだんだん入ってきて現在に至る、という感じです。

実際の豆の姿が、アイデアの源

そらまめくんの世界は、近所の原っぱのイメージです。雑草ひとつでも、いつでもどこにでも生えているものを描こうと思っています。本をみた子どもが外で「“そらまめくん”にのっていた植物だ」と発見して、それが何の植物か親子で調べものをしました……といったエピソードをきくと、細かいところまで見てくれていることに身が引き締まるというか、うれしいです。すみからすみまできちんと描かないと、と思いますね。

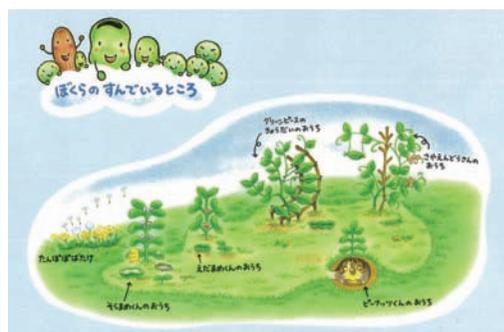
前作の『そらまめくんながいがいまめ』では「さんじゃくまめ（サヤの長さが30～40cmにもなるササゲの一種）」を登場させました。シリーズの続きを考える時に、新しいキャラクターをだそうと考えて豆のことを調べたら、豆って本当になりの種類があって。このさんじゃくまめも「こんなに長い豆があるんだ、すごい」と思い、

自分で種から育ててみました。インゲンがすごく長くなったようなものができて、面白かったです。

彼らの住むお家でいうと（下写真）、私、ピーナッツが地下にできるって知らなかったんですよ、わりと大人になるまで。ここにどうやって住むのかと考えた時に、地下は暗い、明かりはどうする？殻をランプにすればいいんだ！と思いつきました。ソラマメもたまたまサヤむきをしたら中がすごくふわふわしているのにびっくりして。そらまめくんのベッドにするという発想がわきました。

最新作でもふわふわベッドが物語のカギ

最新作の『そらまめくんのあたらしいベッド』では、そらまめくんご自慢のふわふわベッドが、いつもより弾力がなくなっていることに、そらまめくんが気づく場面から始まります。えだまめくん、さやえんどうさん、ピーナッツくん、グリーンピースのきょうだいたちという、いつもの仲間にも確かめるのですが、みんなにも「ふわ



そらまめくんたちの家。ピーナッツくんの家には、殻で作ったランプシェードが

ふわしていない」といわれてしまい。すると、そらまめくんは今が今、すぐにでも変えたい！という性格なので、ふわふわな「わたのき（綿花）」が世の中にあることを知って、その場で探しに行ってしまうんです。2作目『そらまめくんとめだかのこ』にできた“めだかくん”に再会して、わたのきがありそうな場所を教えてもらい、自分のベッドで小川をくだるうちに、流されて迷子になってしまいます。そこで新しい豆の仲間に出会って助けてもらい、わたのきのありかを教えてもらって綿が収穫できるまで待つことになるのですが……。

「わたのき」を描くにあたって、自分でも育ててみたんですよ。やはり現物を育てると、思い描いていたものと図鑑とは違いますね。葉っぱのつきかたとか、意外と虫に強いんだとか、いろいろなことがわかってきます。

綿の花は最初、ハイビスカスに似たような真っ白い花を咲かせるのですが、しばらくとなぜか、ピンク色の花になります。その花が枯れると実がなって（コットンボールというらしいのですが）、ぱかっと割れると中に綿ができています。綿は本当にふわふわですよ！1粒の種から何でこんなものができるんだろう？と不思議ですよ。いろいろな楽しみ方ができる綿花、とても面白い植物でした。

久々の新作はタイトルありきで始まる

今回の作品はタイトルが先に浮かんで、内容をあとで考えたので、けっこう無理無



「わたのき」に登るそらまめくんたち。絵本をタテに使って迫力満点



なかやさんが実際に育てた綿花。育てる時に感じた驚きが絵にいかされている

理だったんです（笑）。気持ちも新たに新刊を出したいと思って、『『そらまめくんのあたらしいベッド』はどうか』とタイトルが先に浮かんでしまいました。なので、それに即した内容を考えるのがたいへんでした。これまでの作品で年月が経って、そらまめくんのベッドもだいぶ消耗しているはず、布団だって使ってへたってくると、また、綿打ちしてふっくらさせるじゃない、と考えついて。

1作目と比べると大きな出来事というか、話の中で長い時間経過がありますし、内容も複雑化しているので、当初かなり長くなってしまいました。そもそも3～4歳

ぐらいを対象年齢にしているの、編集者と苦勞に苦勞を重ねて、文章を思い切って削って、なんとかおさめました。

9年ぶりに新しい気持ちで描かせてもらって、この本を初めてみる人にも、既刊本を知っている人にも、より世界観が広がった今回の作品を楽しんでいただけるかなと思っています。

1作1作、最後のつもりで

絵本作家という仕事は、いってしまえば本当に作品だけ、自分の作品1本で勝負しなければならないので、作品をいい形で残すために、かなり真剣になります。1作1作、全力を尽くしてきた作品は大切なものなので、いい形で世にだしたいという気持ちになります。

1作を完成させるにはすごく時間がかかるので、がんばっても1年に1冊が精いっぱい。最近本当に「これからあと何冊、描



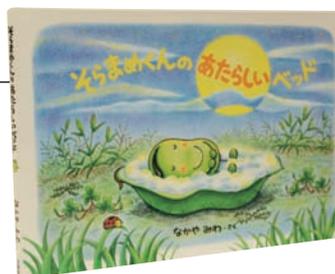
なかやさんの作品に登場するキャラクターたち。豆、どんぐり、クレヨンと誰にもなじみ深いものばかり

けるかな?」と思うんですよ。そしていつも「もうこれが最後の作品かもしれない」と思いながら完結編として描いているので、次作をといわれた時に、何も考えていないんです。もういつもいつも、次どうしようって(笑)。その繰り返しなんですけどね。

最新作『そらまめくんのあたらしいベッド』

小学館、880円＋税、2015年5月27日刊行

ある日、ふわふわベッドの様子がいつもと違うことに気がついたそらまめくん。くたびれてしまったサヤの中のわたを新しくしたくて、まだ見たこともない「わたのき」を探しに、小川を下っていくのですが……うずらまめ、ひよこまめ、スナップえんどうの姉妹といった新しい仲間たちも登場します。



『そらまめくんのベッド』

福音館書店、743円＋税、1999年（初版は1997年発行の「こどものとも」）

くものようにふわふわで、わたのようにやわらかいベッドが宝物のそらまめくん。仲間たちが「ベッドでねむってみたいなあ」といつてくるのですが、つかわせようとはしません。でもある日、その自慢のベッドがなくなってしまいおおさわぎに……シリーズ第1作目にして、なかやさんのデビュー作。

『そらまめくんとめだかのこ』

福音館書店、743円＋税、2000年（初版は1999年発行の「こどものとも」）

原っぱに大きな水たまりができ、豆の仲間たちがさやを浮かべて楽しそうに遊び始めました。でもベッドをぬらしたくないそらまめくんが、ピーナッツくんのベッドに乗せてもらったところ、ひっくり返って水の中へ。流されて迷子になっためだかのこをみつけて、なんとか元の小川に返そうと奮闘します。

『そらまめくんのぼくのいちにち』

小学館、838円＋税、2006年

ある晴れた日に気持ちよく目覚めたそらまめくん。たんぼぼの綿毛をみつけてひらめいたのが、大きな穴をほって綿毛を敷きつめベッドを作ること。豆の仲間たちを喜ばせようとみんなを集めるのですが、雨が降ってきて綿毛が全部流されてしまって……そらまめくんたちの住む世界の広がりがある一冊。

『そらまめくとながいがいまめ』

小学館、838円＋税、2009年

新しいキャラクター「さんじゃくまめ」が登場。ふわふわベッドが自慢のそらまめくんに、自分たちのはもっとすごい！とさんじゃくまめたちが勝負を挑みます。なかなか勝てずがっかりしたそらまめくんたちでしたが、そらまめくんのベッドが大活躍する場面がやってきて、みんな仲良しに。